



(昭和13年生)

## 新年寅年を迎えて

東区 野井倉洋豪



本年寅年(戊寅)を迎えるにあたり、自分の医師歴をふりかえるのも良いかと思い、この原稿をしたためました。

1963年(昭和38年)3月 国立熊本大学医学部卒業 インターン制度1年間あり

1964年(昭和39年)第36回医師国家試験合格

鹿児島大学医学部病院佐藤教授の勧めで医局入局 消化器系疾患希望にて第3研究室中馬講師指導のもと、当時成人病(日本固有の病名)が問題提起され、この病気を早期に発見する手段として、胃癌に対しては、レントゲン検査(二重造影法)、従来の硬性内視鏡に代わり軟性内視鏡(内視鏡カメラよりファイバースコープ、異常部位の生検等)胃部集団検診等並びに人間ドックの導入が盛んになり中馬講師のもと人間ドック成人病検診(事業所)糖尿病外来の創設に携わり、佐藤教授退官1975年(昭和50年)3月まで医局在籍

1975年(昭和50年)4月より県立病院内科部長として勤務

1975年(昭和50年)10月より1981年(昭和56年)9月まで済生会川内病院内科勤務

1981年(昭和56年)10月より市内紫原にて内科有床診療所開設

2015年(平成27年)同診療所閉院

2016年(平成28年)1月より米盛病院勤務

2018年(平成28年) Orthomolecular Medical Nutrition & Associate 終了

2020年(令和2年)3月 同病院退職

2020年(令和2年)4月 介護老人保健 シルバーライフ 知覧 勤務 現在に至る

医療関係では、医局在籍時、腹痛の訴えのあった、ポルフィリン症。開業時、肝機能障害にて来院、下肢、肩甲部筋肉痛あり、筋炎による検査値異常、骨髄腫3人、リュウマチとして加療中、糖尿病と下肢運動障害あり、遺伝子異常によるミトコンドリア異常症、母親・子供2人。済生会病院勤務中、マクロアミラーゼ血症。シルバーライフ 知覧、粘液性嚢胞性胆管腫瘍疑いの貴重な症例を経験することができました。

今後さらに臨床生化学検査においても分子栄養学的検査の適用も大事なことと考えています。

例えば、AST ALT低値は補酵素としてのVit B6の不足によるもの鉄代謝、フェリチン低値、種々の精神神経疾患、潜在性鉄欠乏性貧血、軟骨生成に関与等、さらに基準値の検査所間の相違(鉄代謝のより基準値を求める必要あり)。糖尿病の動脈硬化に関与する因子は、食後高糖の関与ある平均血糖値、血糖日内変動検査等必要。脂質と動脈硬化にはnon-HDL-CHO TG/HDL-CHO等をパラメーターとして経過をみる必要あり。

高尿酸血症には、代謝亢進ではなく、排泄障害が大きくあり(尿酸クリアランス検査) ストレスによる活性酸素の上昇を処理するた

めに尿酸値上昇あり。

最後に食生活・肥満（内臓脂肪の増加阻止）を診療の場にとりいれること。カロリー制限より、低糖質の推奨，G.I.値の低値のものをえらぶ。ブドウ糖のとりすぎは満腹中枢刺激にて食欲低下あり，他方果糖には満腹中枢抑制効果ないため，過剰摂取になりやすい可能性あり。

次に医業の他に1989年（平成1年）12月鹿児島東南ロータリークラブ入会。社会奉仕活動に参加，台湾グランドパークRC，米国ネーマンスRCとの交流，2020年インド訪問。ニュー

デリー近郊の小学生（ヒマラヤ山地より寄宿学生たち）に文房具，毛布，飲料水器等送呈。ガンジス川近郊の小中学校生たちに，昼食用食器として弁当箱を送呈。ロータリーは奉仕・親睦・学を理念として，世界中のロータリアンたちが共に，世界で，地域社会で，そして自分の中で，持続可能な良い変化を生むために，人々が手を取り合って行動するものです。

最後に，医者となってから57年余過ぎてきましたが，今後も前をむいて悔いのない余生を送りたいものと願っています。